
蕾が花開くとき

ひとり雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蕾が花開くとき

【Nコード】

N4066G

【作者名】

ひとり雨

【あらすじ】

季節は巡る。時は、待つてはくれない。蕾が花開くのも同じ。だからこそ、私達は迷い、戸惑い、そして美しい花となって咲いていく。

（前書き）

この小説は、森山直太朗さんの「さくら」をモチーフにした企画小説です。

寒かった冬が終わりを迎え始めて、外も暖かくなってきた。
きつと、もうすぐあの季節がやって来る。それなのに私は願っていた。叶うはずの無い願いを。

春なんて来なければいいのにと。花なんて咲かなくてもいいのにと。

雲ひとつ無く晴れ渡った空の下、子供達で賑わう公園に四人組の男女が集まっていた。私、榎本沙代えのもと さよもその一人。

「それじゃ、洵じゅんのバスケット推薦の合格を祝して、カンパーイ!!」

真まっ先にそう言っコンビニで買ったジュースを飲むのは、相嶋有紀あいしま ゆき。少し茶けたショートヘアの女の子。明るくてしっかりしていて、何でもできるリーダータイプ。

「って言ってもマグレだけだな」

有紀にそう言っ謙遜しているのは、本日のお祝いの主人公、狩か谷洵りやじゅん。洵は物凄く運動が出来る。特に、バスケットボールが上手い。今回、私達四人の先陣を切って大学に合格した男。洵は黒い短髪がお洒落だし、背も高くて、バスケットボールやっていて爽やかだし、顔も良いから女子にモテる。でも何故か彼女を作らないという謎もある。何でだろう……。

私が考え込んでいると、コンビニの袋を無言で差し出してくれたのは、私達四人の中で一番勉強が出来る、志野智しの ち。智は黒髪でツヤのあるウェーブヘアに銀縁の眼鏡で、見た目通り頭脳明晰で、学校のテストなどで何度も私を助けてくれている。

「……肉まん、美味しいよ」

「あっ、沙代、あたしが作ってきたサンドイッチも食べてよ。美味しく作れたか自信ないんだけど、味見で、ねっ?」

智と有紀に肉まんサンドイッチを渡され、それを頬張っているのが私。何ら特徴といった特徴も無い、敢えて言うなら天然パーマのくるくるした髪をツインテールにしているって事くらい。勉強も運動も、全てが出来ない。僻みじゃ無いけれど、本当に私は全部苦手。

今はそんな事どうでもいい。私はそう思ってサンドイッチに齧かぶり付き、すぐに笑顔になった。

「有紀の作ったサンドイッチ、美味しい！ 本当に、すごく美味しいよ！！」

「あははっ、ありがと。沙代は本当に美味しそうに食べるよね」

有紀もそう言っただけに笑いかける。有紀は料理がとても上手で、お菓子から家庭料理まで、とにかく何でも作れる。そして、その全てが本当に美味しい。

私は常々、有紀の作った料理の味見係なので、確信して言える。今日のサンドイッチも具が詰め込みすぎているしとパンも柔らかくて、とても食べやすい。

「しかし、洵は凄いいよねー。名門って言われてた私立の大学、受かったやつたんだから。夢はバスケット選手っていうのも、叶えられるんじゃない？」

「大学でもバスケット続けていこうと思ったら、要勉強だぞ」

有紀と智に言われ、洵は肉まんを口いっぱい頬張っていたのを飲み込んでから言った。

「受かったって言っても夢はまだだし。勉強か……面倒臭えー。留年覚悟かもな、俺。ま、それでも一年多くバスケット出来るから別にいいんだけど」

「うわー、バスケ馬鹿……余計にお金かかるってこと、分かってないでしょ」

有紀が洵を睨む。私は有紀に聞いてみた。

「ねえ、有紀はやっぱり料理の方の大学に行くの？」

「大学じゃなくて、専門学校かな。資格とかも取りたいし。調理学

校だったら調理師とかの資格も取れるからね」

「調理師……智は将来どうするの？」

智に聞くと、智はしばらく無言で考えてから言った。

「……検事」

「……け、検事!？」

「そんなに驚く事じゃないでしょ、沙代。智は昔からクールな振りで正義感が強いし。司法試験でも受けるんでしょ？」

有紀が聞くと、智は首を振って言った。

「んー……大学行つて、大学院に行く、かな」

「長い間勉強しないと駄目なんでしょ？ うう、聞いただけでも頭痛くなるよ……」

「頭痛薬、飲む？」

智が真剣な顔で薬を私に差し出した。それに私が呆然としていると、有紀が言う。

「智、偏頭痛とかの頭痛じゃないわよ。沙代にとっては知恵熱」

「ゆ、有紀い！ 酷いよ！」

「あははっ、ゴメンゴメン。冗談よ。じゃあ、沙代は？」

「えっ？」

私は思わず聞き返してしまった。有紀達三人の話を聞くのに夢中で、聞かれていることに気が付かなかった。有紀はもう一度私に言う。

「沙代は将来、どうするの？」

将来。そう、この問題が、私を悩ませている。今まで考えてこなかったわけでは無いけれど、私は有紀や洵や智と違い、卒業間近の今になっても、自分の将来の夢を見つけられずにいた。

一応、大学の福祉学科に進む事が決まっているが、そこに入っただけで、という具体的なことなど何も決めていない。

「……沙代？」

「……えっ」

有紀に言われて、私は我に返った。つい深く考え込んでしまうのが私の悪い癖なのだ。

「あ、ごめん……考え中、かな」

「ふーん……」

有紀がそう言い、皆が黙り込んでしまったので、私は咄嗟に思いついた様に洵に向かって言った。

「あっ、そ、そうだ洵……これ、お祝いに」
「ん？」

そう言って私は、持ってきた紙袋を洵に手渡した。洵が紙袋を受けとって私に聞く。

「中身は？」

「フェイスタオルと、バスケットボールの本……」

「タオルは練習に使うからありがたいんだけど……何で、本が？」

洵が不思議そうに眺めるのは、私が書店で買ったバスケットボールの基礎練習や用語解説などがまとめられた本。

「だ、だって洵、言ってたよね？ バスケットは基礎が大事だって。だから……」

私が恥ずかしがりながら言うと、有紀と智が笑いを堪えようと必死に口を手で押さえたり、私からあからさまに目を逸らしているのが分かった。だが、二人とも限界だったらしく、すぐに笑い出した。「あっははははっ！ 本当に沙代は真っ直ぐに受け取るよね、人の言葉。基礎が大事って言うのは、練習の上ででしょ？ 基礎そのものになってないって訳じゃないのよ」

「クク……洵が真面目に本読むのも見ものだけど、やっぱり面白い……沙代の天然ボケ」

「っておい！ さり気なく俺の事も貶してるんじゃないよ！」

洵も思わずつつこんでいる。洵は確かに根っからの体育会系だし、本を読むのはどうしても洵には似合わない。それに、プレゼント自体が迷惑だったかもしれないと思い、私は一応洵に聞いた。

「ご、ごめん、洵……迷惑だった？」

「いや、別に。そんな事無いけど」

「そういう身回りの世話なら、やっぱり好きな子にしてみたいよねっ。ごめん、私なんかが……」

「は？」

私の質問に、洵の顔が一気に赤くなるのが分かった。有紀と智が更に大きく笑い出す。有紀は呆れ顔だし、智なんかは笑いすぎたのか、お腹を押さえている。私は不思議に思ってもう一度聞く。

「？ 洵、何で赤くなるの？」

「ばっ、バカ！ だから迷惑だとかお世話だとか、そんな事俺は一言も言っていないだろ！ それに……」

「？」

顔を赤くしながら洵が私を横目に見てくる。私は洵が何を言いたいのかわからず洵をじっと見つめ返す。洵は私と視線が合うと、すぐに視線を逸らして言った。

「……何でもねえよ！」

「……頑張れ、青春。沙代のボケはブラックホールだ、底が見えない」

「バスケの天才も、こればかりはねー」

智と有紀は、そう言っただけで洵の肩を慰めるように叩く。

私が訳の分からない顔をして、ふと上を見上げると、公園内に植えてある太い桜の木に芽吹く、小さな蕾が目に入った。今は硬く閉じているが、もう少しすればこの蕾も花開き、美しい花を咲かせるのだ。

「もうすぐ咲きそうね、桜」

「……花粉症対策、しないと」

「桜よりバスケだな。部活やめてからずっと自主トレで、暇なんだよな」

有紀達が口々に言う。皆、春を心待ちにしている。それでも、私は思ってしまった。

春が来る、そうすれば桜の花が開く。桜咲く、なんて世の中では何かを成し遂げたり、
幸せが訪れたような意味で使うけれど、私はそうは思わない。

だって蕾のままなら、ずっと皆一緒に居られるから。
一塊に固まって、寒さに堪えて。それでも、離れることは無いから。

でも蕾が花開いて、咲いてしまったらどうだろう。花が開けば、花びらが分かれてしまう様に、私達四人も、春が来たら桜のように花が咲き、別々になってしまう。

くだらない話だと殆どの人は笑うだろう。それぞれの道を歩む事が悪いわけでもない。

私は、恐れていた。皆と離れていく事を。ずっと蕾のままでいい、
と思ってしまうていた。

「じゃあ、またね」

「沙代……？」

有紀が呼びかけてくれているのも気にせず、私は逃げるように公園から小走りに去って行った。

公園で洵の推薦合格のお祝いをした翌日。私は会社勤めの父がお弁当を忘れたので、それを届けに行った。その帰りに小学校の時から通っていた桜並木が立ち並ぶ商店街を通った。その道をゆっくりと歩いていると、私は不思議と忘れていたはずの幼い頃を思い出した。

「すごい！桜、咲いているよ！」

後ろを付いてきている母にそう言っ、私は感激しながら桜の木を見上げている。今よりももっと背が小さくて、目に見える桜がとても大きく見えた小学校入学の時。背負ったランドセルと小学校の制服がとても嬉しかった。

私が桜を見ていると、有紀と智が母親に連れられながら私のとこ

るにやって来た。母同士が語り合っている中、私達も桜の木を囲み、座り込んで話していた。

「今日から毎日ここ、通るんだよ。一緒に学校行こうね、さよ！」
「うん！」

有紀が私にそう言って笑う。私もうなずき返した。智は、ただ座り込んで桜を見上げている。

「……桜と梅ってどっちがおいしいの？」

智が、ぼそつとそう言ったのを私は真剣に考え込んで、答えた。

「桜じゃ、ないかなあ」

「うそー！桜って食べられるの？」

有紀がそう言って智に聞く。

「じゃあ、さくらもちって桜じゃないの？」

「うーん、それは……」

有紀がそういつて唸る。私達の素朴で、ちよつと的外れな話も、桜には関係ないみたいだった。お日様の光に照らされて木が眩しく輝いたり、風に煽られて、木の枝が大きく揺れる。桜の気持ちは分からないけれど、私には気持ちよさそうに感じた。

「わたし、桜になりたいなあ」

「さよ？」

「……なんで？」

有紀と智の声が重なって私に発せられる。私は桜の木に向かって手を懸命に伸ばしながら言った。

「だって、とつても高くつて、桜の花をいっぱい咲かせて。皆にきれいって褒めてもらえるから」

私がそう言くと、私の声を聞きつけたのか、後ろから声がした。

「桜になってどうするんだよ？」

「じゅん……」

黒いランドセルを背負った洵は、その時はまだ私より背が低かった。洵は、私の隣に来て言う。

「桜は、桜。さよは、さよ。桜だって、さよにはなれないんだ。さ

よは、さよだろっ」

「わたしは、わたし……」

私は洵の言葉を繰り返して、もう一度桜の木を見上げた。すると、有紀が桜を指差して言った。

「あつ、桜の花びら！」

有紀や智と共に、私も立ち上がって桜の花びらを掴もうとする。だが、桜の花びらはまるでからかうように私達の手に近付いたり、離れたりに揺れながら落ちていく。

私が両手を伸ばしても掴み損ねた、と思った時、横からすつと手が伸びた。私が掴めなかった桜の花びらを手のひらに収めたのは、洵だった。握った手のひらをひらき、小さな桜の花びらを確認した洵は、それを私に差し出した。

「お前に、やる」

「……いいの？」

「桜にはなれなくても、さよは、さよだ。でも、花びらくらい持つてても、誰も怒らないだろう」

洵にそう言われて、私はそつと洵の手から桜を受け取った。

「ありがとう、じゅん」

そう言って私は洵に笑いかける。洵がすぐに私から目を逸らす。

「あつ、時間だ！ 入学式行こうよ！」

有紀がそう言い、私の手を引いた。私は桜の花びらを握り締めながら桜並木の道を走って行った。

私は素直に嬉しかった。桜を眺めた事も、皆と一緒に居られる事も。だからこそ、離れたくない強く願ってしまうのだ。皆の傍で一緒に居たいと。今も、昔も、私は桜に悩ませられている。勿論、桜は何も悪くない。季節は自然と巡り、移り変わって行く。分かっているのだ。それでも待ち構えている別れに、私は怯えている。

商店街の店を眺め歩きながら、私はグリーンのパーカーの下に着

ていた白いスカートのポケットに手を入れ、小さな手帳を取り出した。手帳を開くと、透明の樹脂で出来た栞しおりがあり、その栞には桜の花びらが綺麗に挟まれていた。

あの時、洵に貰った桜の花びらは、すっかり色褪いろあせて白っぽくなっていた。しかし、桜の花びらは年月を感じさせないくらいに清廉で美しかった。

「何やつているんだろ、私……」

思わず独り言が出た。だが、今は桜の花びらよりも、自分の存在がちっぽけに見える。

私が茫然と考えながら、目の前に見えてきた横断歩道を渡ろうとしていた、その時。

自分の前で、腰を痛めたらしい白髪のお婆さんが、いきなりその場に倒れこんだ。倒れこんだお婆さんが見えていない、大型のトラックが迫ってきている事に気が付き、私は咄嗟に人目も気にせずに走り出し、横断歩道に飛び出してお婆さんを庇った。

「！」

私が飛び出してきたことに驚いたトラックのドライバーは、急いでブレーキを踏んだらしく、私とお婆さんの数十センチ手前で止まった。

「だっ、大丈夫か！？」

トラックのドライバーの男性が、慌しく降りてきて私とお婆さんに言った。

「だ、大丈夫です……お婆さんも、大丈夫ですか？」

「え、ええ……」

お婆さんは弱々しくうなずく。私が立ち上がろうと足に力を入れるが、腰が抜けているようで、立つ事が出来なかった。すると人ごみの中から、聞きなれた声が響いた。

「沙代！？」

「……洵……」

「お前、今飛び出して……何て無茶……！」

洵は立てずに居た私を助け起こしてくれた。その時、一瞬にして身体の全身が震えた。洵に抱きつく形で、私は震えを抑えようと必死だった。

「！ お、おい、沙代……？」

洵が私の様子がおかしい事に気がついて、私の顔を見つめる。だが、それと同時にお婆さんにも異変が訪れた。

「うっ……」

小さな呻き声をあげて、お婆さんは腰を押さえる。私は震えを感じながらもお婆さんに問いかけた。

「大丈夫ですか？ 腰、痛いんですね……？」

「おい、婆さん大丈夫か！？ い、急いで病院まで行こう、婆さん送っていくよ。……悪いが、その子のことは頼む！」

「あ、はい……」

洵にドライバーの男の人はそう言つと、トラックにお婆さんを乗せて走り去って行った。

何とか事なきを得た私は、心配してくれた洵が家まで送ってくれらるというので、洵と共に帰り道を歩いていた。洵は自主トレで走りこみをしている時に偶然、あの横断歩道に通りがかったらしい。洵は上下の青いスポーツウェア姿で、少し汗臭かった。

洵は、少し怒ったように私に言った。

「全く……無謀すぎだろ。もしあのトラックのブレーキが間に合わなかったら、死んでたかもしれないんだぞ」

「ごめん……」

「……まあ、いいけど」

洵がそう言つて前を向く。その横顔は、とても頼もしかった。小学校の頃と、何も変わっていない。私はおもむろに話し始めた。

「……確かに、今思うと凄く怖かった。でも、お婆さんを放つてなんておけないよ。横断歩道を渡る前から、腰が悪かったみたいだったし。それに……今の私にしか出来ない事かもしれないから……」

……」

「……それでいいんじゃないの」

「えっ？」

「夢。考え中、って言ってたけど、お年寄りを放っておけないって、お前はお前らしく考えて、行動できるんだからさ。それがお前の夢だろ」

洵に言われて、私は初めて気が付いた。自分の中で、いつの間にか色んなことを考えて、行動していた事に。私自身が、夢を見つけた事に。

「ありがとう……さっきも、洵がいなかったらきつと、ずっと震えたままだった。今も……私、何がしたいのか分かった気がする。本当に、ありがとう」

私は洵に笑いかける。そのまま歩こうとすると、洵が立ち止まっていることに気が付き、私は洵に話しかけた。

「洵……？」

私と洵の距離が、一メートルほど離れる。洵はその場で顔をあげて、私に言った。

「沙代！」

「何？」

「俺は……お前のことが好きだ」

「！」

心臓が一気に早まるのが分かる。「好き」と言われて、動揺した私の顔はたちまち赤くなった。洵を見ると、洵の顔も真っ赤になっている。

「……別に返事はいらねえから。ただ、伝えておきたかったんだ。

……もうすぐ、ともに会えなくなるし。でも、俺は……ずっとお前が好きだったんだ」

「……………」

私が驚きから何も言えなくなっていると、洵はそのまま私に背を向け、言った。

「……………じゃあな」

「！ あっ……」

すぐに洵は私とは逆方向へ行ってしまった。その後ろ姿に、何とも言えない不安を覚えながら、私はただ、その場に立ち尽くしていた。

家に帰ると、母が驚いた様子で私に言った。

「今、病院から連絡があったのよ。沙代、車に跳ねられそうになったお婆さんを助けたんですってね。そのお婆さんが、ありがとうって伝えてくださいって」

「……うん」

「どうしたの？」

「……何でも、ない」

私は、搾り出したような細かい声でそう言っていると、即座に二階の自分の部屋に入って、ベッドに倒れこんで顔を埋めた。

色んな事が混じり合って、正直私は混乱していた。

有紀や智や洵と別々の、それぞれの道を歩む事。自分の夢が見つかった事。そして、洵に「好き」といわれた事。どれも悪い事では無いはずなのに、どうしてこんなにも自分は困惑するのか。

私は桜の花びらの葉を取り出し、それを見つめる。

先ほど洵に言った、洵に言うまで一度も言えなかった、自分の決意の言葉。それを呟く。

「今の私にしか、出来ない事を……」

私はベッドから勢いよく起き上がり、自分の部屋から飛び出して一階へと降りた。居間に行くと、母に言った。

「お母さん！ 裁縫箱って、ある……！？」

「え？」

それから一カ月後。私の高校は卒業式を迎えた。在校生や恩師の

先生に卒業おめでとうございます、と言われると思わず涙が出そうになったが、私は学校に居る間は、決して泣かなかった。

卒業式の合間などに有紀や智、それに洵と目が合ったりしたが、私は何事もないように普通に振舞った。

そして、卒業式が終わった後、私はメールで有紀達を呼び出した。『高校合格の祈願をした神社に来てください。沙代より』

私は神社の本殿の前で有紀達を待ちながら、少し痛んだ自分の両手を見た。所々絆創膏が巻かれ、見るからに痛々しい。だが、私は妙に落ち着いていた。

本殿前は、静かだった。私の前には、神木として大きな桜の木が聳え立っていた。枝垂れている枝には、まだ硬く閉じた蕾が幾つもあった。

私は深呼吸をして、絆創膏だらけの両手を後ろで硬く握り締めた。しばらくすると、私と同じ制服姿の有紀達三人が神社にやって来た。

「あ、居た、沙代！　どうしたのよ、いきなり神社につて……」

「懐かしいな……有紀が奮発してお賽銭に二千円も入れたの覚えてるよ」

「……………」

有紀と智は口々に言うが、洵だけは無言だった。有紀が智を睨む。

「もう！　智は一言多いのよ！　……それで？　何か話があるんでしょ、沙代」

私は、もう一度深く息を吸ってから、三人に向かって言った。

「今から、卒業式を始めます！」

「え？」

有紀が私に聞き返す。だが、私はそのまま話を続けた。

「相嶋有紀さん。あなたは、とても料理が上手で、何時も私達に美味しい料理を食べさせてくれました。調理師という夢に向かって、こつこつとした努力を絶やさないあなたを、私はずっと応援しています！　頑張ってくださいっ！！」

「沙代……」

有紀が私を見つめるのが分かる。次に、私は智の方を向いた。

「志野智さん。あなたは頭が良くて、私がテストなどで困っている時、分からない所を丁寧に教えてくれました。検事という夢の為に今まで以上に勉強して努力するあなたを、私はずっと目標にしています！ 絶対に夢を叶えてください！」

「……勿論」

そう言って智は微笑んでくれる。そして、最後に私は洵の方を見た。

「狩谷洵さん。あなたは小学校の頃からずっとバスケットボール一筋で頑張ってきました。私にもとても優しくしてくれて、嬉しかったです。これからもバスケットで上を目指すあなたを、私はずっと尊敬しています！ その才能を精一杯生かしてください！！」

「……おう」

三人にそれぞれ言うと、自然と私は涙が零れ落ちてきた。涙を懸命に拭いながら、大声で叫んだ。

「私も夢が見つかりました！ 大学の福祉学科に行って介護士になります！ 皆とは離れちゃうけど、桜が咲いたら……夢が叶ったら、私と……私とまた会ってくれますか！？」

私が言い終えると、その場に沈黙が訪れた。私が下を向いて俯いていると、有紀達の声が響いた。

「あつたりまえよ。絶対、また会えるよ」

「……次に会った時も沙代の天然ボケ、期待してる」

「俺もバスケットがんばるからさ。お前も、頑張れ」

私が顔を上げると、有紀達は笑顔だった。それを見て、私もとても嬉しくなって笑った。

「よって皆さんに敬意を表し、応援のプレゼントをします。……はい、これ」

私はそう言って両手で握っていた物を有紀達に手渡した。それは、私が一ヶ月かけて作った、手作りのお守りだった。中央には『桜が

咲きますように』と赤い糸で刺繍がしてある。裁縫が得意ではない私は、この刺繍に何度も失敗しながら作り上げた。

「あ！ 洵のお守りにだけ何か入ってるわよ」

「そ、それ……」

有紀の言葉に私が顔を赤くするのに気が付かず、洵はその場でお守りの中に入っていた小さな紙の内容を読み上げた。

「なになに……面と向かって言えなくてごめんなさい。私も洵の事が好き……です」

洵の言葉が途切れ途切れになる。洵は、はっとしたように私を見た。有紀と智もにやにやしながら私と洵を見る。

「なーに？ いつの間にか進展してたんじゃない、あんた達」

「……末永くね」

私と洵は、恥ずかしがりながらもお互いの手を握り、うなずいた。

私が有紀達に向かって大きく手を振ると、有紀達も手を振り返してくれた。

そうして私達は、別れた。お互いの道へと、花開く為に。

それから季節は移り変わり、年月が流れて桜が満開になる頃、再開の 때가訪れた。

「今は料理屋でコックとして働いているけど、まだまだ下働きね。智は？」

「検事の卵……かな」

「沙代は苦労の甲斐あって介護士になれたし。洵も新聞に載るようになったじゃない」

「……あ、来たよ」

「本当だ。おい、沙代！ 洵！」

遠くから声がして、私は洵と共に駆け出しながら手を振った。有紀と智が、あの時別れた神社の前に居た。

「やっぱり今もラブラブね、沙代と洵は」

「……相思相愛、だな」

「もう！ 有紀、智！」

有紀と智に冷やかされて、私と洵は顔を赤くした。私はムキになつて有紀と智を睨むが、二人が幸せそうに微笑むのを見て、私も同じく微笑んだ。

桜が咲く前に、私達は別れた。

そしてまた、その蕾が花開く時、私達は……また出会う。

（後書き）

どうもです。作者のひとり雨です。

春らしく、青春を描いた小説にしてみました。お楽しみいただけただでしょうか。

この小説は、「春の旋律」という企画の小説でして、森山直太郎さんの「さくら」をモチーフにして作った小説です。

儚い別れと、今しか気付かない、伝えられない思いが込められているとてもいい歌だと思いましたので、この歌をモチーフにしました。

果たしてこの小説でそれが表現できていたかどうか……未熟者ゆえ、至らない点も数多くあると思います。ですが私は、これを書き終えて、とてもすがすがしい気分になりました。曲を聴きながら書いたのですが、「また頑張ろう」という気持ちになれました。

企画にも参加させていただき、ありがとうございました。また参加させていただけるとありがたいです。

この小説を読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4066g/>

蕾が花開くとき

2010年10月8日15時31分発行